

籠神社(宮津市)所蔵の海部氏系図(国宝)と「記紀」本来の王系譜=本書の王系譜

[籠神社]、本宮に主祭神の彦火明命、相殿に豊受大神・天照大神・海神・天水分神を祀る。同時に、日本最古の海部氏系図を伝える。眞名井原に鎮まる奥宮は神代の鎮座地とされ、豊受大神と天照大神を祀ってきた。垂仁御世、眞名井原に鎮座する天照皇大神が伊勢国五十鈴の川上に遷座したという。

海部氏系図 本系図 始祖彦火明(天火明)一〇一〇一三世孫倭宿禰(珍彦)一武振熊(神功將軍)

同 勘注系図 始祖彦火明(火明饒速日)一天香語山一天村雲一天忍人(倭宿禰)一

☆この海部氏系図は、戦前には問題視されて門外不出とされてきた。だが戦後にその価値が見直されて国宝に指定された。これには、理由がある。この海部氏系図から、磐余彦(神武)と神功が共に三世紀後半に生きた人物で、かつ八幡(応神)が二人の兄と判明するからだ。

☆一般的に八幡信仰は宇佐神宮(宇佐市)が最古とされるが、磐余彦が祖父の火火出見を祀り始めた鹿児島神宮も、「当宮の石体宮こそ、八幡信仰の発祥地」と主張して一步も譲らない。

その石体宮は、磐余彦が東征計画を練った所とされ、彼にちなむ巨石を御神体として祀る。同時に、お産の神様としても有名だ。それは、神功が石体宮で八幡を産んだからとされる。

『水鏡』も『今昔物語集』も、一一三二年の大宰府文書も、神功がここで八幡を産むことや、石体宮の巨石に八幡の文字が刻まれていた由を伝える。さらに『今昔物語集』には、八幡神は大隅国に現れ、次に宇佐に遷り、最後に石清水に垂迹した由が記されているような。

185 頃年(大乱勃発) 210~230年 250~ 270年 285~ 300年過ぎ(301年=辛酉年)

